



私の原風景

私は昭和45年（1970）1月13日に豊中市の千里ニュータウンで生まれ、それから高校卒業までの18年間を豊中で過ごしました。青春時代を過ごした中で、思い出深く残っている場所は千里中央の商業施設、千里セルシーです。千里セルシーでは毎月さまざまな芸能人が来てライブを行っていたのですが、当時ファンだった菊池桃子さんが来た時のことは鮮明に覚えています。イベント広場に2千人以上の観客が集まっていたその光景は、私にとってイベントの原風景のようなものです。令和元年

（2019）に千里セルシーが閉館したというニュースを目にした時は、思い出の地がなくなる寂しさを感じました。昭和63年に大学進学で上京し、大学ではイベントサークルの運営に携わり自らイベントを開催するようになりました。その後紆余曲折を経て平成7年（1995）に子供の頃からの夢であったプロレスラーとしてデビューすることになりました。平成9年には私たちの団体、DDTプロレスリングを旗揚げしましたが、最初は選手も私を含めた4人しかおらず、大手団体出身で

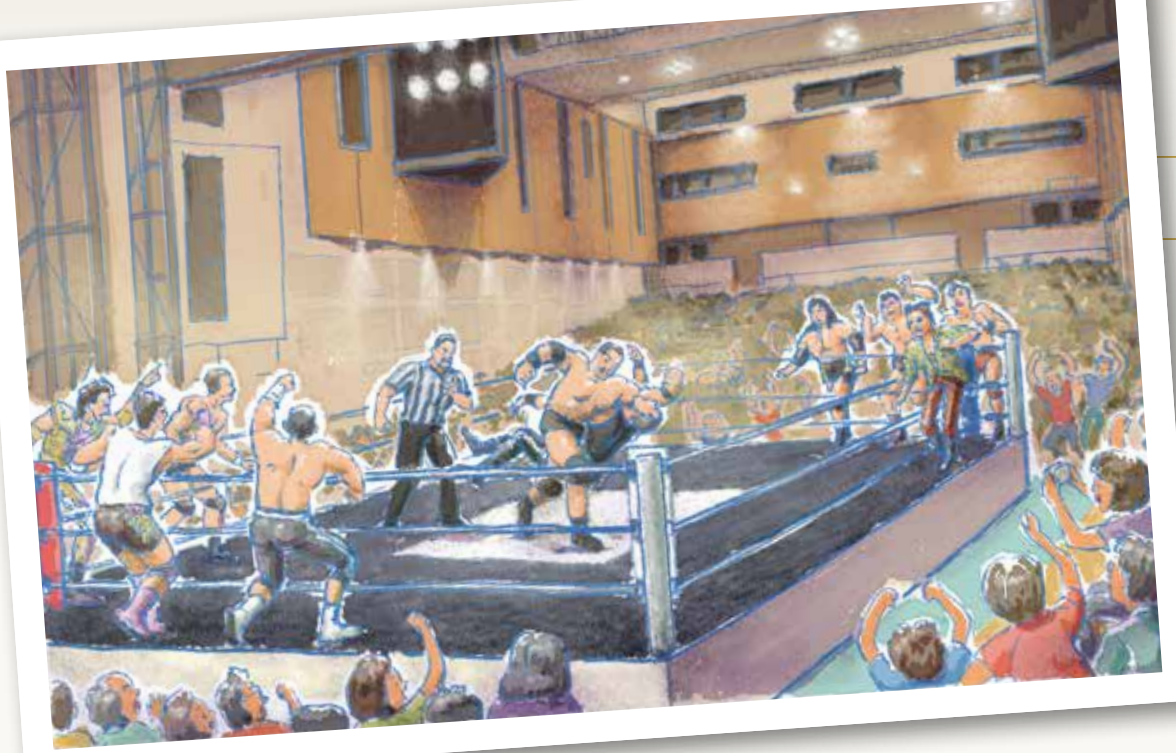
はない我々はプロレスマスコミなどから見向きもされず、観客を集めることに苦労する厳しい船出でした。それでも大学時代の経験を活かし、渋谷のクラブで大会を開催したり、一般誌で特集を組んでもらったりと、既存のプロレス団体ではやってこなかった方法で注目を集めていきました。その方法で新たなファン層を開拓していくと、次第にさまざまなメディアから取り上げられるようになり、観客の動員も比例して伸びていくようになりました。

平成11年12月にはプロレス

たか き さん し ろう
高木三四郎 [プロレスラー]

豊中市生まれ。株式会社CyberFight代表取締役社長であり、現役プロレスラー。平成7年（1995）にプロレスラーとしてデビューし、平成9年にDDTプロレスリングを旗揚げ。エンタメ性の高い興行で日本武道館や両国国技館での大会を成功させるほか、「路上プロレス」やアイドルとのコラボレーション興行、飲食店やストレッチ専門店の経営など新しいことにも果敢に挑戦している。





の聖地・後楽園ホールでの大会を行うなど徐々に団体が軌道に乗っていく中で、いつか地元である豊中で大会を開催するということは私にとつての悲願でした。しかし、当時の豊中ではプロレス団体が大会を行うということがほとんどなく、使用できる会場を探すところから奔走し、準備期間もない中で非常に苦労したことを覚えています。それでも地元の皆さんの協力もあり、平成18年6月にローズ文化ホールで豊中大会を初めて開催することができました。千里セルシーで見たような何千人という観客ではありませんでしたが、両親や地元の仲間たちが本当にたくさん会場に駆けつけてくれ、歓声を上げ、拍手を送ってくれる光景をリングの上から見た時には熱いものがこみ上げて来ました。

その後DDTプロレスリングは両国国技館や日本武道館といった大会場での大会を行えるようになり、平成29年3

月にさいたまスーパーアリーナで開催した旗揚げ20周年記念大会では1万人以上の観客を動員するまでになりました。そして同年9月にはメディアア事業などを行うサイバーエージェントとして企業としてもしっかりとした基盤が出来上がった年となりました。

旗揚げ当時の吹けば飛ぶよ

うな状態から、今ではプロレス業界第2位の規模まで会社は成長し、追い付け追い越せの精神で業界1位を目指しています。千里セルシーで私自身が体感したイベントの感動や興奮というものを、DDTプロレスリングを見に来てくれた皆さんに体感してもらえように、これからも励んでいきたいと思っています。

Q 豊中に帰ってきたときは何をしていますか？

A ここ10年は多忙でなかなか帰ることができていないのですが、豊中に帰った時は実家で飼っているシーズーを散歩させながら、街並みの変化を観察したりしています。このようなエッセーを書く機会をいただいたことで豊中でのさまざまな思い出の場所を思い返しましたので、今度帰れた時は母校である第九中学校や、千里セルシーの跡地が今どうなっているか、思い出の地を改めて歩いてみたいですね。